建安の「寡婦賦」について
—— 無名婦人の創作と詩壇 ——

福　山　泰　男

は　じ　め　に

後漢末・建安時代は，詩壇[1]と称すべき詩人集団が史上はじめて形成され，曹操政権の下に集った詩人たちは，題詠・応酬等の組織的文学活動を活発に行なった。

「寡婦賦」はそのような詩壇における作品群であり，曹丕・王粲・丁廙の妻の作とされるものが現存する[2]。曹丕は他に「寡婦詩」を作り，曹植にも同題の詩が残っている[3]。曹丕の「寡婦賦」と「寡婦詩」を見比べると，制作の背景を述べた序文が同じ趣旨であり，本文の内容・形式にほとんど差異はない。したがって，曹丕・曹植の「寡婦詩」も，「寡婦賦」と同じ題材の作品であり，「寡婦」をテーマにした一連の詩賦作品が一時に会詠されたと推察される。

「寡婦賦」で特筆すべきことは，丁廙の妻という，史伝に記載がない無名婦人の作とされる作品が残っている点である。もしそれが婦人の手になる作品だとすれば，建安文学にしめる女性作家の位置が窺われ興味深い。

しかも，一無名婦人の制作と伝えられる「寡婦賦」の作品水準は，同題の諸作と比べ出色である。そのことは，次の２点 — 曹丕・王粲の「寡婦賦」本文が断片的にしか残っていないのに対し，丁廙の妻作とされる作品は，亡佚が少なく原形に近いかたちで伝えられていること。また，西晋時代の潘岳は，特に丁廙の妻作とされる「寡婦賦」を意識し，それを下敷きにしたと見なしうる，同題の賦を制作しているという事実からも想像できよう。

「寡婦賦」は，建安文学に多く詠われる，「女性」を主題とした作品の一つである。だが，それを女性みずからが制作対象として取り上げたとすれば，いかなる経緯によるのか。またそれは，どのような意義を持ちうるのか。

建安の文学における「女性」は，表現対象としてだけでなく，創作の担い手として，文学史に位置づけることが可能であろうか。

---

[1] 詩壇・文壇という言葉は，近現代とは，生産と流通のあり方を異にする古代中世の文学には当てはめにくい。しかし小論は，一応先行研究の用語にならい，組織と運動（創作・応酬）を備える詩人グループのことを，便宜上，詩壇・文壇と表現しておく。

[2] 曹丕・王粲・丁廙の妻「寡婦賦」は，『芸文類聚』（中文出版社，1980）巻34，人部18「哀傷」所収。

[3] 曹丕「寡婦詩」は，『芸文類聚』巻34，人部18 「哀傷」，曹植「寡婦詩」は，『文選』（芸文印書館『胡本文選』，1979）巻23，謝礼運「廬陵王墓下作」李善注，21葉右に，２句を引く。

小論は，丁廙の妻の制作とされる作品を中心に建安の「寡婦賦」を取り上げ，建安文学の形成に関わる「女性」について考察したい[4]。

一

曹丕「寡婦賦」には，次のような序文がある。

陳留の阮元瑜余と旧有り。薄命早に亡し。其の遺孤を存するに感ずる毎に，未だ嘗て愴然として心を傷めずんばあらず。故に斯の賦を作り，以て其の妻子悲苦の情を敘ぶ。王粲等に命じ竝びに之を作らしむ。

陳留阮元瑜，与余有旧。薄命早亡。毎感存其遺孤，未嘗不愴然傷心。故作斯賦，以敘其妻子悲苦之情。命王粲等竝作之[5]。

「寡婦賦」は，建安七子の一人，阮瑀の没後，曹丕がその妻子の悲嘆を思いやってみずからら作り，王粲等の建安詩人グループにも制作させた作品である。会詠者として名が残るのは，前述したとおり，詩を含めると，曹丕・曹植・王粲・丁廙の妻の４人である。

阮瑀が死没したのは，212年（建安17年），曹丕と丁廙の妻両作品の季節描写から見れば，同年の暮れ・冬頃と思われる。「寡婦賦」の会詠は，212年の冬以後であろう。この時，曹丕26歳，曹植21歳，王粲36歳。曹丕「寡婦賦」序にいう，「其の遺孤」とは，当時３歳の阮籍を指す。

阮瑀死没の前年，211年（建安16年）は，曹丕が五官中郎将・丞相副に，曹植が平原侯に任じられ，丕・植の下に，王粲・徐幹・陳琳・阮瑀・應瑒・劉楨の詩人グループが集結している[6]。

「寡婦賦」の会詠が行われる時代背景を概観したい。208年（建安13年），赤壁戦の後は，三国分立という膠着状況が進む。曹操は，211年（建安16年），漢中を併呑し，以後，漢魏禅譲の政治工作に腐心する。このように三国拮抗と，魏政権の確立という政治背景のもと，211年（建安16年），曹丕と建安文人による南皮の遊が催される。また建安詩人グループは，鄴下において，贈答詩や会詠により直接詩文の交流をはかる文学空間を形成した。曹操幕下の文人は，それ以前は一堂に会することなく，従軍等の共通体験をテーマとし，個々に詩を応酬していた。建安の詩人集団が確立するのは，曹丕が五官中郎将につき，曹植が平原侯に封ぜられた211年（建安16年）から，王粲，徐幹等の逝去により建安七子の全員が没する217年（建安22年）までの６，７年間と考えられる。（以後この期間を，「建安詩壇確立期」と呼称。）

阮瑀の没した212年（建安17年）というと，曹操がその春，銅雀台において諸子に賦を競作

---

[4] 拙稿「後漢末・建安文学の形成と『女性』」（『山形大学紀要＜人文科学＞』第15巻第４号，2005）では，建安文学における「女性」の文学史的位置付けについて簡単にふれている。

[5]『芸文類聚』巻34，人部18「哀傷」，600頁。『文選』巻16，潘岳「寡婦賦」李善注，19葉右。引用部分は，以上の出典から集佚した厳可均『全上古三代秦漢三国六朝文』（中華書局，1985）「全三国文」の構成にしたがう。1073頁。

[6]「十六年春正月，天子命公世子丕為五官中郎将，置官属，為丞相副」（『三国志』＜中華書局＞1982）魏書，武帝紀，34頁）。「始文帝為五官将，及平原侯植皆好文学，粲与北海徐幹字偉長，広陵陳琳字孔璋，陳留阮瑀字元瑜，汝南應瑒字徳璉，東平劉楨字公幹並見友善」（『三国志』魏書，王粲傳，599頁）。

させ，建安詩人グループの関係がより緊密化した年にあたる。「寡婦賦」は，建安詩壇確立期に会詠されたと考えられる。

以上のような制作背景をもつ「寡婦賦」に，丁廙の妻の作とされるものがあると述べたが，その作者については異論がある。建安時代の「寡婦賦」は，『芸文類聚』巻34，人部18「哀傷」に，曹丕・王粲とともに，丁廙妻の作品が収録されている。しかし，『文選』巻16，潘岳「寡婦賦」に付された李善の注釈を見ると，『芸文類聚』で「丁廙妻寡婦賦」と題されるものが，すべて「丁儀妻寡婦賦」として引用されている[7]。

また，『初学記』巻14，「婚姻」は[8]，以上，作者を「丁廙妻」「丁儀妻」とするテクストと異なり，「丁儀婦賦」つまり，丁儀を作者とした「婦賦」として引用している。

厳可均『全上古三代秦漢三国六朝文』「全後漢文」[9]は，以上の諸説を紹介しつつ，『芸文類聚』にしたがって「寡婦賦」の作者を丁廙の妻とする立場をとり，その本文を各書から輯佚する。

陸侃如『中古文学繫年』[10]は，作者を，丁廙の妻・丁儀の妻・丁儀とする三説の中で，丁儀の作である可能性が大きいと説いている。だが陸説は，作者が丁廙の妻・丁儀の妻のいずれでもなく，丁儀であるという根拠を示していない。

上記の三説は，丁廙の妻もしくは丁儀の妻による作品とするか，あるいは丁儀の作と考えるかに大きな違いがある。丁廙の妻・丁儀の妻いずれも史料が残らない無名の婦人であり，どちらの制作かを問うことにあまり意味はない。かつ，丁廙・丁儀は兄弟であり，政治的・文学的にもほぼ同一の行動をとっている。両者いずれの妻であっても，それを取り巻く社会的・文学的環境に大差はなかったであろう。

一方，「寡婦賦」を，丁儀の作品と見なすための史料は，『初学記』以外存在しないし，これより以前の史料，『芸文類聚』・『文選』李善注の記載を無視することは難しい。

「寡婦賦」の作者を考えるときに問題にすべきは，それが無名婦人による制作か，史書に記載されるような文人の作品かという点であろう。そこには，建安の詩人集団が，詩文の競作を行う中に，女性の創作者が参与しうるのかという課題も浮かび上がる。そのことは，建安文学の特質を窺う上で大きな意味をもっていよう。

婦人の著述活動についていえば，「隋志」[11]には，「漢成帝班婕妤集一巻」・同注「班昭集三巻」以後，後漢末・建安時代では，「後漢黄門郎丁廙集一巻」注に，「後漢黄門郎秦嘉妻徐淑集一巻」・「後漢董祀妻蔡文姫集一巻」・「傅石甫妻孔氏集一巻」が著録される。

このうち蔡琰は，『後漢書』の「列女伝」に記載される当代一流の名家の出身であるが，徐淑は，夫秦嘉と詩の応酬をしたことが伝えられている以外，史料は残らず，孔氏は，史料・作

[7]『芸文類聚』の引く「寡婦賦」は，比較的完篇に近いと推測され，李善注が引く句は，ほぼそれに含まれる。ただし，一部，李善注にあって，『芸文類聚』には無い句がある。
[8]中華書局，1962，354頁。
[9]991・992頁。
[10]人民文学出版社，1985，388頁。
[11]中華書局，1982。

品のいずれも残存しない無名の婦人である。

丁廙の妻・丁儀の妻の別集は，いずれも，「隋志」に著録されていない。しかし，「隋志」は，後漢末・建安時代に，有名な才女のみならず，少数ではあれ無名の婦人が著述活動を行っていた史実を示している。丁廙の妻もしくは丁儀の妻のように，名前すらわからない女性ではあっても，文学の制作に関わっていた可能性はある。

したがって小論は，「寡婦賦」を丁儀の作品であるとする積極的根拠を見出せない以上，『芸文類聚』・『文選』李善注の記載に従い，丁廙の妻もしくは丁儀の妻，すなわち一婦人の作品と考えたい。ただし，前述したように，丁儀・丁廙兄弟いずれの妻であってもあまり差異はない。小論では，『文選』李善注より以前の成書になる，『芸文類聚』の記載にしたがって，「寡婦賦」を丁廙の妻による作品と考えておくことにする。

では「寡婦賦」を，無名婦人である丁廙の妻や丁儀の妻に名を借りた偽作と見なしうる可能性はどうか。丁廙の妻の場合，同時代の蔡琰と違い無名であり，「隋志」にも著録されない。たとえば周知のように，名高い才女蔡琰に仮託して「悲憤詩」が作られたと見なす説はつとに提示されてきた。しかしながら，「寡婦賦」を一無名婦人にわざわざ名を借りた仮託と見なすのは，不自然で理解しにくいように思う。

以上に述べた，女性の作か否か，さらにそれが建安詩壇の文学活動に参与しえたのかどうかという問題点に関しては，当時の文学環境や，「寡婦賦」の本文自体からさらに考察を進める必要がある。

二

建安の「寡婦賦」と比較するために，曹丕「寡婦詩」の序と本文を掲げたい[12]。

友人阮元瑜早亡。傷其妻子孤寡，為作此詩。

友人阮元瑜早に亡し。其の妻子の孤寡を傷み，為に此の詩を作る。

霜露紛兮交下　　霜露紛として交わり下り
木葉落兮萋萋　　木葉落ちて萋萋たり
候鴈叫兮雲中　　候鴈雲中に叫び
帰鵞翩兮徘徊　　帰鵞翩りて徘徊す
妾心感兮惆悵　　妾が心感じて惆悵たり
白日急兮西頽　　白日急に西に頽れ
守長夜兮思君　　長夜を守り君を思う
魂一夕兮九乖　　魂一夕に九たび乖(はな)れ

[12]『芸文類聚』巻34，人部18「哀傷」，595・596頁。

悵延佇兮仰視　　悵として延佇し仰ぎ視れば
星月随兮天迴　　星月随いて天迴る
徒引領兮入房　　徒らに領(くび)を引きて房に入り
竊自憐兮孤栖　　竊かに自ら憐れみて孤栖す
願従君兮終没　　願わくは君に従い終没せん
愁何可兮久懐　　愁いを何とすべき久しく懐う

曹丕の「寡婦詩」は「寡婦賦」と序文の趣旨が同じである。「詩」は，以下に掲げる「賦」の本文とともに，季節・時間の推移を描く点，〇〇〇兮□□という同一形式をとること，また「妾心感兮惆悵」「竊自憐兮孤栖」（「詩」），「傷薄命兮寡独，内惆悵兮自憐」（「賦」）のような類似句もあり，内容・形式に差異がない。

曹植作とされる「寡婦詩」は，次の２句の佚句が残る[13]。

高墳鬱兮巍巍　　高墳鬱として巍巍たり
松柏森兮成行　　松柏森として行を成す

曹丕の「詩」「賦」に様式による区別がないことから推して，曹植の「寡婦詩」も，阮瑀の死没に際して会詠された同時の作と見なしうる。

次に，前節で序文をとりあげた，曹丕「寡婦賦」の本文を見てみよう[14]。

惟生民兮艱危　　惟れ生民の艱危
在孤寡兮常悲　　孤寡に在りて常に悲しむ
人皆処兮歓楽　　人皆歓楽に処り
我独怨兮無依　　我独り怨みて依る無し
撫遺孤兮太息　　遺孤を撫して太息し
挽哀傷兮告誰　　哀傷を挽きて誰にか告げん
三辰周兮逋照　　三辰周りて逋いに照らし
寒暑運兮代臻　　寒暑運りて代わり臻る
歴夏日兮苦長　　夏日の苦だ長きを歴て
渉秋夜兮漫漫　　秋夜の漫漫たるに渉る
微霜隕兮集庭　　微霜隕ちて庭に集まり
鷰雀飛兮我前　　鷰雀我が前を飛ぶ
去秋兮就冬　　秋を去りて冬に就き
改節兮時寒　　節を改めて時は寒し

[13]『文選』巻23，謝霊運「廬陵王墓下作」李善注，21葉右。曹植「寡婦詩」は，阮瑀没後の墓地の情景を描き，曹丕・王粲・丁廙の妻による題詠と趣を異にしている。鈴木修次は，墓を詩歌の題材にすることは，「古詩十九首」から見える新しい題材であると述べる。鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店，1967）395～398頁参照。
[14]『芸文類聚』巻34，人部18「哀傷」，600頁。

水凝兮成冰　　水凝りて冰と成り
雪落兮翻翻　　雪落ちて翻翻たり
傷薄命兮寡独　　薄命を傷み寡独たり
内惆悵兮自憐　　内に惆悵として自ら憐れむ。

上記の現存する18句中，10句は季節の推移を表しているが，表現に目新しさはない。また，曹丕「寡婦賦」に寡婦の具体的な姿は見えにくい。曹丕は阮瑀と，「賦」・「詩」の序文に「有旧」「友人」と述べるような関係にあった。したがって，曹丕「寡婦賦」は寡婦の姿に仮託しながら，親しい友の死が自分にもたらした哀傷の方を詠み表すという一面をもっていたのではないか。

王粲「寡婦賦」は，次の通りである[15]。

闔門兮却掃　　門を闔じて却掃し
幽処兮高堂　　高堂に幽処す
提孤孩兮出戸　　孤孩を提(ひ)きて戸を出で
与之歩兮東廂　　之と東廂に歩む
顧左右兮相怜　　左右を顧みて相怜れみ
意凄愴兮摧傷　　意は凄愴として摧(くじ)け傷む
観草木兮敷栄　　草木の敷き栄えるを観
感傾葉兮落時　　葉を傾けて落つる時に感ず
人皆懐兮歓豫　　人皆歓豫を懐い
我独感兮不怡　　我独り怡ばざるに感ず
日掩曖兮不昏　　日は掩曖として昏からざるに
朗月皎兮揚暉　　朗月皎として暉を揚ぐ
坐幽室兮無為　　幽室に坐して為す無く
登空牀兮下幃　　空牀に登りて幃を下ろす
涕流連兮交頸　　涕流連として頸に交わり
心懼結兮増悲　　心懼結して悲しみを増す

他に次の欠文が残る。

欲引刃以自裁　　刃を引きて以て自裁せんと欲すれども
顧弱子而復停　　弱子を顧みて復た停む[16]

王粲「寡婦賦」は18句現存するが，形式は，中間に兮をはさむ５字句・６字句，および以・而を交えた６字句を用いる。曹丕の作に比べて形式にやや変化が見られ，描写もより細かい。王粲の作は，夫の死を目にした寡婦の心情を具体的な立ち居と重ね，綿々と詠っている。

曹丕と王粲の作品の字句を比較してみると，「人皆処兮歓楽，我独怨兮無依」（曹丕），「人皆

[15]『芸文類聚』巻34，人部18「哀傷」，601頁。
[16]『文選』巻16，潘岳「寡婦賦」李善注，21葉右。

懐兮歓豫，我独感兮不怡」（王粲）と類似句がみられる他，時間の推移を述べる点においても両者は共通する。また，曹丕と同じく，寡婦に成り代わり，「我」と述べて一人称の語りをとっている。その点は，後述するように丁廙の妻の場合も同様で，「寡婦賦」は，阮瑀の妻を語り手として偽装するという約束を踏まえ，会詠されたといえる。

さらに，丁廙の妻の場合も，曹丕・王粲の「賦」と類似する句・表現が見られる。「寡婦賦」は，曹丕の序文が示すように，曹丕が王粲等に命じて競作させたものだが，はじめに曹丕が制作し，王粲等がそれを踏まえて詠んだものと推測される。

三

ここでは，丁廙の妻「寡婦賦」を，前節で挙げた曹丕・王粲の作と比較しながら，見てみたい。以下に掲げる本文は，曹丕・王粲と同様に寡婦の悲境とそれにともなう季節・時間の推移が詠まれる。また王粲のように，「門を闔じて」から「空牀に登」るまでの寡婦の所作も描かれている。さらに，曹植の「寡婦詩」が詠じた挽歌的な表現に連なる葬儀の叙景も含まれる。全体の首尾一貫した内容からして，丁廙の妻「寡婦賦」の現存テクストは欠落箇所がそれほど多くないと考えられ，他の三詩人のものと比べ作品としての生命をより保っているといえよう。

次に掲げる本文の配列・構成は，『芸文類聚』・『文選』李善注・『初学記』を集佚した，厳可均『全上古三代秦漢三国六朝文』[17]，「全後漢文」にならう。「全後漢文」が，欠文（□印）と推測する部分もそのまま引くが，文字を改める部分は注記する。

惟女子之有行　　惟れ女子の行有る
固歴代之彝倫　　固より歴代の彝倫
辞父母而言帰　　父母を辞して言（ここ）に帰ぎ
奉君子之清塵　　君子の清塵を奉ず
如懸蘿之附松　　懸蘿の松に附するが如く
似浮萍之託津　　浮萍の津に託すに似たり
恐施厚而徳薄　　施し厚くして徳の薄きことを恐れ
若履冰而臨淵　　冰を履みて淵に臨むが若し
何性命之不造　　何ぞ性命の造（な）らざらん
遭世路之険迍　　世路の険迍に遭いたり
栄華曄其始茂　　栄華曄（あき）らかに其れ始めて茂り
所恃奄其徂泯　　恃む所は奄として其れ徂泯す
静閉門以却掃　　静かに門を閉じて以て却掃す

[17]中華書局，1957，991・992頁。

魂孤煢以窮居　魂孤煢にして以て窮居し
刷朱扉以白堊　朱き扉を刷くに白き堊を以てし
易玄帳以素幬　玄き帳に易うるに素き幬を以てす
含慘悴以何訴　慘悴を含みて以て何にか訴えん
抱弱子以自慰　弱子を抱きて以て自ら慰めん
顧顔貌之艴艴　顔貌の艴艴たるを顧み
対左右而掩涕　左右に対し涕を掩う
時翳翳以東[18]陰　時は翳翳として以て東に陰り
日亹亹以西墜　日は亹亹として以て西に墜つ
鳥淩虚以徘徊　鳥は虚を淩えて以て徘徊す
□□□□□□
雞斂翼以登棲　雞は翼を斂めて以て棲に登り
雀分散以赴肆[19]　雀は分散して以て赴き肆ぬ
還空牀以下帷[20]　空牀に還りて以て帷を下し
払衾褥以安寐　衾褥を払いて以て安らかに寐らん
気憤薄而交縈　気憤薄して交ごも縈り
抱素枕而歔欷　素枕を抱きて歔欷す
想逝者之有憑　逝者の憑く有ると想い
因宵夜之髣髴　宵夜の髣髴たるに因らん
痛存没之異路　存没の路を異にするを痛み
終窈漠而不至　終に窈漠として至らず
時荏苒而不留　時は荏苒として留まらず
将遷霊以大行　将に霊を遷して以て大行せんとす
駕龍轜於門側　龍轜を門側に駕し
設祖祭於前廊　祖祭を前廊に設く
□□□□□□
旐繽紛以飛揚　旐繽紛として以て飛揚す
彼生離其猶難　彼の生離すら其れ猶お難し
矧永絶而不傷　矧んや永絶して傷まざらん
□□□□□□
涕流迸以淋浪　涕流れ迸りて以て淋浪たり

[18]「全後漢文」は稍に作る。『芸文類聚』により東に改める。
[19]「全後漢文」は羣逝に作る。『芸文類聚』により赴肆に改める。
[20]「全後漢文」は幃に作る。『芸文類聚』により帷に改める。

自銜恤而在疚　　恤えを銜みて自り疚に在り
履冰[21]冬之四節　冰冬の四節を履む
風蕭蕭而増勁　　風蕭蕭として勁さを増し
寒凛凛而弥切　　寒さ凛凛として弥いよ切なり
霜凄凄而夜降　　霜凄凄として夜降り
水溓溓而晨結　　水溓溓として晨に結ぶ
雪翩翩以交零　　雪翩翩として以て交ごも零つ
□□□□□□
瞻霊宇之空虚　　霊宇の空虚なるを瞻(み)
悲屏幌之徒設　　屏幌の徒らに設けるを悲しむ
仰皇天而歎息　　皇天を仰ぎて歎息し
腸一日而九結　　腸一日に九たび結ぶ
神爽緬其日永　　神爽緬として其れ日永く
歳功忽其已成　　歳功忽として其れ已に成る
惟人生於世上　　惟れ人の世上に生きるや
若馳驥之過櫺　　馳驥の櫺(れんじ)を過ぎるが若し
計先後其何幾　　先後を計れば其れ何幾ならん
亦同帰乎幽冥　　亦同に幽冥に帰せん
（下欠　上欠）
賤妾煢煢　　賤妾煢煢たり
顧影為儔　　影を顧みて儔となさん

丁廙妻「寡婦賦」の形式は，２句の４字句以外，すべて，曹丕の作品と同じく，〇〇〇＋助字＋□□と６字句を用いる。しかし，曹丕・王粲のように兮字は用いず，代わりに，之・而・其・以・於・乎と，助字を多彩に使用する。

全体の構成を大まかに見ると，はじめに８句目まで婦道を一般的に述べた後，９句～12句目で夫の不幸に遭遇したことをいう。13句～34句目は「静かに門を閉じて」から，夜，空閨に独り寝するまでの，寡婦の所作・心情が描かれる。35句～44句目は，夫の葬送とそれにともなう感慨が詠われる。45句～52句目で，心象風景というべき冬の叙景を連ねた後，53句目から，夫に先立たれた嘆きと「同に幽冥に帰せん」という思いを述べて，全体を詠み終えている。

この首尾の整った展開は，後に丁廙の妻の作品を下敷きにして制作され，完篇として残る潘岳「寡婦賦」の構成とほぼ同じである。そのことも，丁廙の妻「寡婦賦」の現存部分が，より完全な形に近いことの傍証となるだろう。

[21]「全後漢文」は春に作る。『芸文類聚』により冰に改める。

さらに，王粲・曹丕のものと比較しながら，丁廙の妻作の本文を具体的に見たい。

11・12句目「栄華曄其始茂，所恃奄其徂泯」は，王粲の「観草木兮敷栄，感葉傾兮落時」という句と，前半の句づくりや季節の運行を述べる描写が似ている。しかし，王粲の方が，季節の感傷を詠むに止まっているのに対し，丁廙の妻は季節と人生の衰亡を類比的に表している。

13・14句目「静閉門以却掃，魂孤煢以窮居」は，王粲に「闔門兮却掃，幽処兮高堂」という類似句がある。両者を比べると，王粲は寡婦の所作を叙するのみだが，丁廙の妻の方は，空閨に向かう姿とその孤独な心情をあわせ詠んでいる。

19・20句目「顧顔貌之艴艴，対左右而掩涕」は，王粲の「顧左右兮相怜，意凄愴兮摧傷」という句と後半の句が類似する。王粲が寡婦の悲泣する様を描くのみなのに対し，丁廙の妻は夫の顔色を思い出し，左右に向かって「涕を掩う」と述べて感情表現が細やかになっている。

27・28句「還空牀以下帷，払衾褥以安寐」は，王粲の「坐幽室兮無為，登空牀兮下幃」という部分の後半の句と似ている。丁廙の妻は，王粲が空床に就く所作を１句で述べるのを，２句を費やし流麗に寡婦の立ち居を表している。

丁廙の妻によるこの２句を，直前の25・26句「雞斂翼以登棲，雀分散以赴肆」とあわせ見ると，鳥の帰巣をアレゴリーとして描き，虚しく空房に向かう自分と対比させて述べている。

以上くだくだしく見たが，両作品を見比べると，対比的表現法や描写の具体性・流麗さにおいて，丁廙の妻「寡婦賦」は，細部を見ても王粲より工夫が凝らされているといえよう。

次に，丁廙の妻と曹丕の「寡婦賦」を比べてみよう。すでに触れたように，曹丕「寡婦賦」の方は，寡婦の心理と切り離して季節の推移を述べる部分の比重が大きい。その部分，曹丕の「三辰周兮逓照，寒暑運兮代臻，歴夏日兮苦長，渉秋夜兮漫漫，微霜隕兮集庭，鷰雀飛兮我前，去秋兮就冬，改節兮時寒，水凝兮成冰，雪落兮翻翻」という10句に対応する，丁廙の妻の季節描写は，46～52句目「履冰冬之四節，蕭蕭而増勁，寒凛凛而弥切，霜凄凄而夜降，水溓溓而晨結，雪翩翩以交零，□□□□□□」の７句である[22]。丁廙の妻の句の方は，阮瑀の没した時期と推測される冬の叙景のみであるが，季節の推移がゆったりと，きめ細かく描かれている。

さらに，この部分は，蕭蕭・凛凛・凄凄・溓溓・翩翩，と畳字が連用されているが，寒々しい季節感を喚起する洗練された修辞といえよう。このような巧妙な表現法は，21・22句目「時翳翳以稍陰，日亹亹以西墜」[23]にも見られ，翳翳・亹亹という畳字によって，日暮の緩やかな時間の流れが細やかに描写されている。

建安の「寡婦賦」は，時とともに摩滅し，本文を失っていった曹丕・王粲の現存作品と比較考察しにくい面もあるが，丁廙の妻「寡婦賦」の作品性の高さが，細部においても際立ってい

[22]偶数句，52句目は，厳可均が，復元・構成するように，欠文であろう。記号を含め，そのまま引用した。
[23]この２句は，『文選』巻45，陶淵明「帰去来」の「雲無心以出岫，鳥倦飛而知還，景翳翳以将入，撫孤松而盤桓」に付された李善注（19葉左）にも引かれる。陶淵明のこの４句も，時のゆったりとした推移を，細やかに描く点で，丁廙妻「寡婦賦」と相通じる。あるいは，陶淵明は，丁廙の妻の句に，学ぶ所があったのかもしれない。

る事実は否めない。なお例示すれば，丁廙の妻作の，15･16句目「刷朱扉以白堊，易玄帳以素幬」という対句は，朱・白，玄・素という，色彩の巧妙な対比といえよう。

さらに，建安の「寡婦賦」に共通する類似句として興味深いのは，母子に関する描写部分である。三者を列挙してみよう。

曹丕

挽哀傷兮告誰　　遺孤を撫して太息し

撫遺孤兮太息　　哀傷を挽きて誰にか告げん

王粲

提孤孩兮出戸　　孤孩を提(ひ)きて戸を出で

与之歩兮東廂　　之と東廂に歩む

同

欲引刃以自裁　　刃を引きて以て自裁せんと欲すれども

顧弱子而復停　　弱子を顧みて復た停む

丁廙の妻

含慘悴以何訴　　慘悴を含みて以て何にか訴えん

抱弱子以自慰　　弱子を抱きて以て自ら慰めん

ここに表されたような母子の情愛は，経書・史書のテクストでは，しばしば説かれてきた。しかし，建安にいたるまでの文学テクストにおいて，子から母への「孝」を述べるものは見受けられるが，母性自体の情愛表現はきわめて少なかった。また，「寡婦賦」のような，母自身による語りもほとんどなかった[24]。

上に引いたような，建安の「寡婦賦」に詠みこまれる母子の姿は，断片的ではあるが，文学史上，新しい題材といえる。より比較していえば，曹丕の「遺孤を撫して太息し……」と，王粲の「孤孩を提(ひ)きて戸を出で……」という句は，母子が連れ添う情景にすぎない。一方，王粲の「刃を引きて以て自裁せんと欲すれども，弱子を顧みて復た停む」，丁廙の妻の「慘悴を含みて以て何にか訴えん，弱子を抱きて以て自ら慰めん」という句は，母の子に対する強い愛情が示された表現といえよう。しいていえば，丁廙の妻の方は，子供への愛情を母親自身の慰めとすると述べているが，母性の一面がかいま見られ独自の表現となっている。

以上，丁廙の妻「寡婦賦」の突出性を縷々見てきた。それのみならず，丁廙の妻の創作は，後代の作家が依拠すべき建安文学の規範の一つともなっている。先述したように，西晋の潘岳は，建安の「寡婦賦」を踏まえて作品を残した。潘岳の「寡婦賦」は，『文選』李善注を参照すると，じつに，34句にわたり，丁廙妻「寡婦賦」の句が引用されている。李善が指摘しない句とあわせれば，丁廙の妻の「寡婦賦」の現存する60句中，36句におよぶ部分が，潘岳「寡婦

[24]拙稿(注４)で，蔡琰作とされる「悲憤詩」は，そのような母子の文学的表象の歴史において突出した建安の文学テクストであることに少しふれた。

賦」の下敷きとされているのである。潘岳の賦が下敷きにした丁廙妻の句は，132句中36句に及び，賦全体の三割近くを占める。

潘岳は，「寡婦賦」の序文[25]で，次のように述べている。

> 昔阮瑀既に歿し，魏文之を悼む。並びに知旧に命じて寡婦の賦を作らしむ。余遂に之に擬し，以て其の孤寡の心を叙す。（昔阮瑀既歿，魏文悼之，命知旧作寡婦之賦，余遂擬之以叙其孤寡心焉。）

潘岳は，序で，曹丕とその「知旧」の題詠に倣ったと述べている。しかし李善注が，潘岳「寡婦賦」の関連表現として引用する「知旧」の句は，王粲の「寡婦賦」の４句にすぎない。それからも窺えるように，潘岳が踏襲したのは丁廙の妻作品の方であった。

小論は，西晋時代の「寡婦賦」に論及する余裕はなく，二，三の例示にとどめたい。

たとえば，潘岳「寡婦賦」は，丁廙の妻の11～14句目を踏まえて，「栄華曄其始茂兮，良人忽以捐背，静闔門以窮居兮，塊煢独而靡依」と詠んでいる。潘岳のこの四句は，王粲作にも類似句があるが，奇数句末に兮の字が置かれる形式の差異以外，ほとんど丁廙の妻の引き写しに近い。

また，潘岳は，丁廙の妻の45～51句目部分を踏まえて「自仲秋而在疚兮，踰履霜以践冰，雪霏霏而驟落兮，風瀏瀏而夙興，霤泠泠以夜下兮，水溓溓以微凝」と述べている。この部分は，丁廙の妻が表していた季節の細かな推移や，畳字の連用等の特長を，忠実に学んでいる。ここでも，潘岳は，曹丕作品に見られた紋切り型の季節描写ではなく，丁廙の妻の表現に着目しているのである。

以上のことから，潘岳は，曹丕・王粲のものより作品価値の高い丁廙の妻「寡婦賦」の構成・表現に学び，それを踏まえて「寡婦賦」の制作に及んだと考えてよい。

四

「寡婦賦」の作者について，経歴・人間関係を少し見てみよう。

丁廙の妻に関連していえば，丁儀・丁廙兄弟は，214年（建安19年），曹植が臨菑侯となって以後，『三国志』魏書，陳思王植伝に，「植既に才を以て異とせられ，而して丁儀，丁廙，楊脩等之が羽翼と為る。（植既以才見異，而丁儀，丁廙，楊脩等為之羽翼。）」と記されるように，曹植の側近となっている[26]。

丁廙については，『三国志』魏書，陳思王植伝の裴松之注が引く『文士伝』に，「廙嘗て従容として太祖に謂いて曰く『臨菑侯……博学淵識，文章絶倫なるに至りては，当今天下の賢才君子，少長を問わず，皆其れに従いて游びて之が為に死せんことを願う。……』（廙嘗従容謂太祖曰『臨菑侯……至於博学淵識，文章絶倫，当今天下之賢才君子，不問少長，皆願従其游而為

[25]『文選』巻16，19葉左。
[26]『三国志』魏書，陳思王植伝，557頁。

之死。……』)[27]」と記載され，曹植の卓越した文才に対する丁廙の傾倒ぶりが示されている。

曹植は，丁儀・丁廙に対し，五言の贈答詩，「贈丁儀」「贈丁廙」「贈丁儀王粲」[28]を残している。その他，曹植「与楊徳祖書」は，曹植と丁廙が互いの文才を敬愛していたことを述べている[29]。

王粲は，213年（建安18年）11月に侍中に栄進後[30]，魏公に就任した曹操のもとで，伝統儀礼の復興と宗廟歌辞の制作にいそしむこととなる[31]。王粲は，それ以前，「寡婦賦」制作と時期がおよそ重なる212～213年（建安17～18年）頃，自身の不遇をかこちつつ，曹植と詩をやりとりしていたようだ。曹植の「贈丁儀王粲」[32]「贈王粲」[33]と王粲「雑詩」[34]から，そのことが窺えよう。

また，「贈丁儀王粲」という詩題からわかるように，丁儀と王粲も近い人間関係にあったと考えられる。「寡婦賦」制作当時の，曹植，王粲と丁儀・丁廙兄弟の親しい文学交流には注目しておきたい。丁廙の妻は，夫が，曹植を中心とした文学仲間の一員であったということからいえば，そのような人脈に，間接的にではあるが連なっていたといえよう。

特に，丁儀・丁廙兄弟は，曹植の文学的才能に心酔し，曹植の政治的な「羽翼」ともなった人物である。丁儀・丁廙兄弟・楊脩は，214年（建安19年）に曹植の側近となるが，その後，後継をめぐる曹丕・曹植それぞれの政治グループが対立しはじめる。曹丕を中心とした「寡婦」にかかわる題詠・競作には，曹植も参加したと考えられるから，「寡婦賦」の競作は，少なくとも両グループが対立する214年（建安19年）以前のことと確言できる[35]。

阮瑀と，「寡婦賦」の作者との関係はどうか。

曹丕は，建安の文人グループの一人呉質に与えた書簡の中で，阮瑀に対する追憶の念をのべ，またその書・記の文彩を高く評価している[36]。王粲は，190年（初平元年）に長安に移り蔡邕に師事しているが，阮瑀も同時期にその弟子となっていたと思われ，王粲と阮瑀は，若年の頃よりの知人であった可能性が高い[37]。

曹丕・王粲が抱く阮瑀への思いには浅からぬものがあり，「寡婦賦」の創作には，両者の，阮瑀に対する哀悼の念が込められていたであろう。ただし，阮瑀死没の212年（建安17年）以前に，建安の詩人集団は鄴下に集結しており，阮瑀は他の建安詩人とも知友の関係にあったは

---

[27]『三国志』魏書，陳思王植伝，裴松之注，562頁。
[28] 三首とも『文選』巻24所収。
[29]『文選』巻42，13葉右・左。
[30]『三国志』魏書，武帝紀および同裴松之注引『魏氏春秋』，42頁。
[31]『三国志』魏書，王粲伝，598頁。
[32]伊藤正文『曹植』（岩波書店，1958）は，古直の説に従い建安16年と推定する。35・36頁参照。
[33]伊藤正文，前掲書は，内容から見て王粲が侍中につく建安20年（実際は建安18年の誤り）以前の作と推定する。46頁参照。
[34]『文選』巻29，13葉右。
[35]寥国棟『建安辞賦之伝承与拓新』（文津出版社，2000）第４章は，丁儀・丁廙グループと曹丕側との政治的対立関係から，丁廙の妻が，曹丕を中心にした「寡婦賦」の会詠に参加する可能性はきわめて低いと述べる（404頁）。しかし，「寡婦賦」は，阮瑀の没した212年（建安17年）以後，少なくとも214年（建安19年）以前の作品である。寥国棟説は，時代背景・制作年代を誤認している。
[36]『三国志』魏書，王粲伝，602頁。及び，裴松之注引『魏略』，608頁。
[37]『建安七子集』（中華書局，1989）附録，「建安七子年譜」372，373頁参照。及び，松本幸男『魏晋詩壇の研究』（朋友書店，1995）第２章「五言詩成立の諸問題」118頁参照。

ずである。したがって，阮瑀を題材とした「寡婦賦」（「寡婦詩」を含む）の競作に，曹丕・曹植・王粲以外の建安詩人が参加していた可能性はある。

なお，丁廙の妻の「寡婦賦」は，創作の経緯を説明した序文はないが，本文の内容や曹丕・王粲の作品との類句からみて，阮瑀の妻を詠んだものと見てまちがいない。丁廙の妻が，そのような具体的な表現対象を，時を隔てて，曹丕派と夫との政治対立後，あるいは夫丁廙が曹丕に誅殺（220年・黄初元年）されて以後制作したとは考えにくい。このように，丁廙の妻の「寡婦賦」と他の建安詩人のそれとは，制作時期がおおむね重なると思われ，また先述したように字句・表現の類似が多い。小論では，丁廙の妻は他の建安詩人と「寡婦賦」制作の場が近接していたと考えたい。丁廙の妻も，「寡婦賦」会詠の場に，間接的にではあれ連なっていたのであろう。

「寡婦賦」制作をめぐる，以上のような人間関係を踏まえながら，では丁廙の妻が，なぜ他の建安詩人とともに「寡婦賦」の会詠に関わることができたかという問題点を検討したい。既述したように，西晋の潘岳は「寡婦賦」の序文で，曹丕とその「知旧」の会詠作品を模擬したとのべながら，実際は，特に丁廙の妻の「寡婦賦」を意識し，それを踏まえることによって「寡婦賦」を書き上げている。

しかし史料が無い以上，潘岳が作品を模擬したと述べる建安詩壇に，丁廙の妻という史伝に名を残さぬ無名女性を直接位置づけることはできない。ただ丁廙の妻が，「寡婦賦」の制作に関与する蓋然性を探るための状況証拠にすぎないが，丁廙の妻の場合，曹操父子と政治的・文学的に親しい関係にあった丁廙の配偶者であった。「寡婦賦」の会詠時期は，前述したように曹丕と曹植の政治グループの対立が激化する214年（建安19年）以前と考えられ，丁儀・丁廙兄弟も，曹丕を中心とする詩賦の会詠に加わっていたのかもしれない。作品は伝存しないが，丁廙自身が「寡婦賦」の製作に関わっていた可能性も考えられる。だとすれば，その関係上，丁廙の妻が，「寡婦賦」会詠に与る何らかの機会を得たのではなかろうか。丁儀・丁廙兄弟と曹植の，親密な文学関係を考えれば，その婦人が，作品の競作に参画しうる環境も想像できなくはない。また逆に，丁廙の妻「寡婦賦」の作品水準の高さから見て，丁廙の妻がもともと，文学的才能にすぐれた女性であり，そのような評判を知った曹丕が，試みに制作を命じたとも想像できる。

以上のような考察・推論に加えて，一婦人が，建安の文学活動に参与しえたとすればその動因は何なのか，さらに論究する必要があろう。それを次章でふれてみたい。

五

「寡婦賦」が会詠されたのは，前述したように，211年（建安16年）から，建安七子の全員が没する217年（建安22年）までの，建安詩壇確立期にあたる。この時期に，なぜ建安詩人の集団的活動が活発化したのか。その動因を探ってみる必要があろう。

岡村繁は，建安詩壇成立の要因を，「六朝門閥貴族社会への完成へと強い傾斜をとって急ぎつつあった後漢末・建安の時代においては，曹操の政権は，そうした貴族名門の社会的指導勢力をふまえ，それを有効に利用することによって，はじめて強固に成立するものであった」ことを認識する曹操の政策に見た[38]。すなわち，曹操は，そのような認識をふまえ，曹丕，曹植を次世代の指導者に育成するために，徐幹，劉楨，応瑒らの建安詩人を，その学問・文学に関わる補佐役として任命し，建安文壇の活動を積極的に支援したと説いた。さらに，「建安の文壇が，その前後の時代から突出して，質量ともに圧倒的な作品を生産し得た根本原因」は，文士達が，文学サロンを通じて栄達のチャンスをはかるために，激しい競争意識をもって創作に臨んだことだとも論じる。

岡村の説は，建安文壇形成の動因を考える一視点を示してはいる。しかし，たとえば小論で取り上げる丁廙の妻のように，一無名女性が，曹丕を中心とした賦の競作に参加するという現象に見られる，開放的な文学空間が形づくられた理由は，それだけでは説明できないように思う。

渡邉義浩は，建安詩壇の形成について，曹操政権の政治・思想的背景から，新たな視角を提示した[39]。渡邉は，まず，「清流」・「濁流」という後漢後期の人間類型に異論を呈し，「自己の有する文化的諸価値を存立基盤として，豪族層の支持を受け，また君主権力に尊重されて，国家機構に重要な役割を果たす」，後漢末以降の知識人層としての「名士」に着目した。渡邉はさらに，曹操が法術主義の立場から，そのような儒教的価値観を保有する「名士」層と対立を深めていく過程を分析する。その過程で，曹操が，唯才主義に基づく選挙基準を公にした令を三度発したのは，「儒教的価値を中核とする名声を，『名士』層の仲間社会に有する者を察挙するという『名声主義』に基づく登用」を否定し，「名士」との対決姿勢を明らかにする目的があったと説いている。

その上で，渡邉は，曹操が，「儒教的価値の優越性を梃子に文化的諸価値を専有する『名士』層に対抗して」，「文学」という「新たな文化的価値」の創出を試みたことを指摘した。また，曹操が行った「文学」宣揚の施策として，文学者の厚遇，「『文学』的価値を基準とした人事」等を挙げている[40]。渡邉は，丁儀・丁廙兄弟について言及し，曹操の「文学」宣揚を背景に，「『文学』的価値を基準とした人事」を推進した者が，丁儀であったと述べる。さらに，曹操の後継となる立太子をめぐる抗争において，曹植を支持した丁儀・丁廙・楊脩等のグループが，いずれも「『文学』を第一の価値基準として尊重する人物」であるのに対して，曹丕を推す側が，「儒教的価値基準を持つ『名士』層の出身」であることが指摘される。そして，「『名士』層は，『文学』という新しい文化価値に対抗して，自己の儒教的価値を保全するために，曹丕を支持した」と説き，「曹丕が次第に儒教的価値の尊重に回帰し，儒教理念に基づく禅譲を行ったこ

[38]岡村繁「建安文壇への視角」（『中国中世文学研究』５，1966）参照。引用文は，６・14頁。
[39]「三国時代における『文学』の政治的宣揚— 六朝貴族制形成史の視点から —」（『東洋史研究』54−13，1995）参照。引用文は，26・37・41・43・47・50頁。関連する論説には，同氏「曹操政権の形成」（『大東文化大学漢学会誌』39，2001）がある。
[40]渡邉義浩は，「曹操の『文学』宣揚」の，具体策の一つとして五官将文学という官職の創設を挙げているが，氏のいう文学は，括弧付きの「文学」であることからも知れるように，概念としてはやや曖昧であり，必ずしも一般的な意味での文学を意味しない。

とは，『文学』に対する儒教の優越を決定づけた」と考察している。

渡邉説で注目すべきは，曹操政権における「文学」の興隆を，儒教価値を標榜する「名士」層に対抗して，曹操が，「文学」という「新たな文化的価値」を創出した所に，その動因を見たこと，さらに，「文学」の終幕を，「曹丕・曹植の立太子争いと『文学』・儒学の価値基準争いがリンク」した点から明らかにした点にある。事実，たとえば，曹操が儒教的価値に反旗を翻した，三度にわたる求才の令（210年＜建安15年＞・214年＜建安19年＞・217年＜建安22年＞）が発布された時期は，ほぼ建安詩壇確立期と重なっている。儒教的価値と対立する新たな「文学」価値の宣揚が，建安詩人集団の文学活動を推進する動因と捉える渡邉の考察は，傾聴に値するように思われる。

では，このような，儒学・文学の価値対立を内包した建安詩壇の活動は，女性作家の参画の可能性も含めて，どのような意義を有しているのだろうか。

六

「寡婦」は，従前見られない新たな詩賦の題材であることをすでに述べた。ではそもそも，「寡婦」に関わる伝統的な観念はどのようなものであったのか。

『礼記』曲礼上には，「寡婦の子，見われたること有るに非ざれば，与に友と為さず。（寡婦之子，非有見焉，弗与為友。）[41]」と見え，『礼記』坊記にも，「寡婦の子，見われたること非ざれば則ち友たらず。君子は以て辟遠するなり（寡婦之子，不有見焉，則弗友也，君子以辟遠也）[42]」とある。これらは，寡婦の子供は，才芸が顕著でなければ友とすべきでないと述べている。また，『礼記』坊記は，男女の距離を厳格に保つべきことを述べる文脈の中で，「寡婦は夜哭せず。（寡婦不夜哭。）[43]」と記している。

また，『礼記』坊記では，「君子は利を尽くさず，以て民に遺す。詩に云う『彼に遺秉有り，此に斂めざる穧（かりいね）有り，伊れ寡婦の利。』と。（君子不尽，以遺民。詩云「彼有遺秉，此有不斂穧，伊寡婦之利。」）[44]」と述べている。ここでは，刈り稲のお零れにあずかるような者として，「寡婦」の存在が挙げられている。

以上各例は，儒教社会におかれた「寡婦」の立場が，差別・抑圧されるものであったことを示している。このような，「寡婦」がもつ被抑圧者・弱者という周縁的な位置づけは，次の『管子』問の一節，「問う，独婦，寡婦，孤寡，疾病の者，幾何の人なるや，と。（問独婦寡婦孤寡

---

[41]十三経注疏整理本『礼記正義』（北京大学出版社，2000）第12巻，60頁。
[42]『礼記正義』第15巻，1658頁。
[43]『礼記正義』第15巻，1659頁。鄭玄は，「嫌思人道」と注す。孔穎達の疏は言及しない。『十三経直解』（江西人民出版社，1993）第２巻下『礼記直解』坊記は，「寡婦夜哭則有希望再嫁的嫌疑。」と注釈する。675頁。
[44]『礼記正義』第15巻，1654頁。この部分の「詩云」以下は，『詩経』小雅，大田では「此有不斂穧，彼有遺秉，此有滞穗，伊寡婦之利。」となっている。『毛詩正義』（同十三経注疏整理本）第５巻，997頁。

疾病者幾何人也。)[45]」にも表れている。

儒教的観念を帯びる「寡婦」の含意とは，以上のようなものであった。だとすれば，建安詩壇が，「寡婦」をあえて取りあげたことの意義は重いように思われる。前節で言及したように，建安文学の興隆は，儒教的価値観へのアンチテーゼの一面をもっていた。しかしながら，建安文学確立の根拠を，儒・文の価値対立のみから捉えるのは，図式的すぎるきらいもあろう。また，たしかに，「寡婦賦」は，儒教テクストに見られる「寡婦」すなわち抑圧される者という観念を越えるものではない。しかし，建安の詩人が，儒教において蔑視され負の価値を帯びていた「寡婦」に成り代わり，「寡婦」の目線からその心情を詠うという試みは，儒教的価値の桎梏を外れてこそ可能になったのではないだろうか。

文学テクストの中で取りあげられる「寡婦」について，建安以前の用例はどうか。宋玉「高唐賦」に，「纖條悲鳴」する樹木のざわめきに，「孤子寡婦，寒心酸鼻す。(孤子寡婦，寒心酸鼻。)[46]」とあり，季節の動きにも悲傷しやすい「寡婦」の姿が詠まれている。張衡「南都賦」に，「寡婦悲吟し，鶤鷄哀鳴す。(寡婦悲吟，鶤鷄哀鳴。)[47]」と記される「寡婦」は，李善が「寡婦曲未詳」と注するように曲名であるが，「寡婦」が「悲吟」することと，「寡婦曲」が「悲吟」されることの二重の文意が読み取れよう。

また，制作年代に揺れはあるが，序に「漢末建安中」と記される「古詩為焦仲卿妻作」は，末尾で，「行人足を駐めて聴き，寡婦立ちて彷徨す。多謝す後世の人，之を戒めて慎みて忘るる勿かれと。(行人駐足聴，寡婦立彷徨。多謝後世人，戒之慎勿忘。)[48]」と詠み，夫を偲び深夜眠れぬ「寡婦」を描いている。

劉向『列女伝』巻４，貞順伝は，寡婦の節義が説かれる部分であるが，その「魯寡陶嬰」では，寡婦陶嬰が，再嫁しない決意を，歌に託しこう詠んでいる。「黄鵠の早(つと)に寡たりて，七年双(とも)にせず。頸を鵶(ま)げて独り宿し，衆と同じうせず。夜半悲鳴し，其の故雄を想う。天命早に寡たり，独り宿すこと何ぞ傷まん。寡婦此を念い，泣(なみだ)下ること数行。……(黄鵠早寡兮，七年不双。鵶頸独宿兮，不与衆同。夜半悲鳴，想其故雄。天命早寡兮，独宿何傷。寡婦念此兮，泣下数行。……)[49]」。ここでの「寡婦」は，貞節の教訓という意義にとどまっていない。はじめに，鳥に託したアレゴリーを用いつつ，「寡婦」自身の心境が詠いだされているのである。

このように，詩歌・賦に詠まれる「寡婦」は，断片的ではあるが，蔑視・差別される者という儒教観念の枠組を離れて，「寡婦」自身の内面に目が向けられているといえる。建安の「寡婦賦」は，そのような文学的因襲に沿いつつ，さらに，友人・阮瑀の死没という具体的な現実を目にした曹丕等が，残された「寡婦」を一人称の語りとし，賦という旧来のジャンルで競作

[45] 諸子集成『管子校正』問（上海書店，1986）147頁。
[46]『文選』巻19，４葉右。
[47]『文選』巻４，８葉左。
[48]『玉台新詠箋注』（中華書局，1985）巻１，53・54頁。
[49]『新刊古列女伝』（台湾芸文印書館『百部叢書集成』所収『文選楼叢書』，1967）巻４，貞順伝13。

した作品群であった。馬積高は，建安の「寡婦賦」について，以前の賦家が描いていない新しいテーマであると指摘しているが[50]，建安詩人の詠んだ「寡婦賦」は，文学的伝統においても旧習を脱する試みといえよう[51]。

要するに，新しい価値観念をもつ建安の「文学」が取りあげたテーマが，「寡婦」であった。また，建安詩人は，このような抑圧された「女性」の心境を，他にも「棄婦」「出婦」[52]等のテーマで会詠している。この点に関連していえば，前述したように，曹丕以外，「寡婦賦」の制作者は，曹植と親密な関係にあった。新たな「文学」という価値を創出した曹操が，建安詩壇確立期に最も嘱望した後継者は，曹植である。曹植は，「七哀」「雑詩」「美女篇」「種葛篇」「精微篇」「出婦賦」「洛神賦」「列女伝頌」等々，とりわけ「女性」を題材に多く用いた作家であるが，「文学」価値が宣揚された建安詩壇確立期に，親曹植グループ派による「寡婦賦」をはじめ，「女性」主題の詩賦が会詠・創作された事実には注目したい[53]。

そしてまた，丁廙の妻という一無名婦人が，建安の文学活動に何らかのかたちで参与しえたとすれば，その要因も以上にのべ来たったことと密接に関係するだろう。建安の詩人集団は，文学に，旧習を突破する新たな生命を見い出した。そこに生じる比較的自由な価値観，開放的文学空間こそが，女性による詩壇活動への関与を可能にした大きな要因の一つといえるのではないだろうか。

結　　び

曹丕は，儒教的価値基準を標榜する「名士」層の支持を受け，禅譲によって，魏王朝を開いた。後漢末・建安時代の終焉は，建安詩壇を花開かせた「文学」という新たな価値に対する儒教価値の優越を意味している。

曹丕・文帝は即位後，曹植の補佐であった丁儀・丁廙とその一族の男性を誅殺する[54]。「寡婦賦」を制作した丁廙の妻は，阮瑀の妻と同じように寡婦の身となった。「寡婦賦」に描かれた阮瑀の遺児・阮籍は，その後，魏末・正始時代に言論・文学活動を展開するが，正始の詩壇に女性の影はない。建安の文学にわずかに窺えた，詩壇活動に関与する女性の存在は後景に退いたといえよう。

---

[50]馬積高『賦史』（上海古籍出版社，1987）145頁。
[51]建安文学の「寡婦」は，様式化された文学空間において描かれているのであり，もとより当時の寡婦の実像を示すものではない。楊樹達『漢代婚喪礼俗考』（上海文芸出版社，1988）第１章「婚姻」第６節「改嫁改娶」は，漢代の女性にとって再婚は珍しいことではなかったことを例証している。鄧偉志『唐前婚姻』は，魏晋南北朝は，婦人の再婚に対する扱いが，後世より開放的であったと説く。138～140頁。
[52]鈴木修次前掲書は，「寡婦賦」と同時期の作と推定。522頁。松本幸男前掲書も同様に考察。147頁。
[53]鈴木修次前掲書は，寡婦・出婦・棄婦・美女等の女性を題材とした作品が，詩・賦両方にまたがっていることを指摘する。530頁。「女性」は，建安文学の共有テーマであったといえよう。
[54]『三国志』魏書，陳思王植伝，561頁。

关于建安文学中的《寡妇赋》

—— 无名妇人的创作和诗坛 ——

福　山　泰　男

后汉末的建安时代，应称之为“诗坛”的诗人集团在历史上第一次形成，在曹操的政权统治下聚集的诗人们，活跃得开展了以题咏，对答等有组织的文学活动。本文以建安文学被会咏的《寡妇赋》为主题，对一系列的诗赋作品进行论述。

《寡妇赋》应该值得特别关注是，这件作品是在历史和传记上没有被记载的叫丁廙的妻子的无名妇人所留下的。《寡妇赋》在建安文学中被多次咏歌，是以“女性”为主题的作品之一。不过，如果是女性自己把自己作为创作对象提出来的话，那么这其中又经历了什么样的过程呢？或者具有什么样的意义呢？在建安文学中的“女性”不仅作为表现对象，而且也作为创作的中坚人物，这在文学史上应该具有一定的地位吧？

本文以丁廙的妻子所创作的作品为中心，引用了建安时代的「寡妇赋」这篇作品，对建安文学的形成过程中和 “女性”相关的问题进行研究。首先，叙述《寡妇赋》的创作背景，接着将曹丕、王粲、曹植及丁廙的妻子的《寡妇赋》进行了比较。另外，在这些基础上对西晋时代潘岳的《寡妇赋》也进行了论述。综合以上的研究，对有关《寡妇赋》作者的经历和人际关系进行了分析。而得出的结论是，丁廙妻子的《寡妇赋》不是伪作，而是真品，具有较高的文学价值，显然可以成为建安文学的一种创作模式。

关于建安诗场形成的直接原因，以前有过如下的研究。后汉末以来作为知识阶层的“名士”，以自己所具有的文化价值为存在的基石，而受到贵族阶层的支持，同时他们对皇权尊重，在国家的机构中也发挥重要的作用。不过曹操从法家的立场出发，和这些具有儒学价值观的“名士”阶层产生了很大的对立。曹操在和这些以儒学价值的优越性为盾牌的“名士”阶层抗衡的同时，试着从 “文学”上创造出新的文化价值。他采取了弘扬“文学”的措施，优待文人和把“文学”价值作为标准进行人事等选拔。“名士”阶层与曹操提出的所谓“文学”的新文化价值进行抗衡，以维护自己的儒学价值，并支持了曹丕。在曹丕的主张下，渐渐地对儒学价值的尊重有了回归，根据儒学理念进行了禅让之事，提高了儒学在“文学”上的优越性。曹操政权下的文学之所以繁荣，应归功于他和宣扬儒学价值的“名士”阶层的抗衡，以及他所创造出的新文化价值，正是其直接原因。“文学”的最后一幕，曹丕和曹植的太子之争也和“文学”・儒学的价值标准的相关，这一点也能得知。

在归纳如上先行研究的基础上，本文对“寡妇”的含意从儒学和文学原文中进行了探索。在诗歌，赋中被吟咏的“寡妇” 篇幅虽然短小,但已远离了儒学观念的框架中被歧视的对象，而且

把触角伸展到了“寡妇”自身的内心世界。建安的《寡妇赋》也承袭了这样的习惯。并且，目睹了自己的友人阮瑀之死的曹丕等人，把被沿袭的“寡妇”作为第一人称，用赋的传统体裁竞相创作出许多作品。具有新的价值观的建安“文学”的创作主题是“寡妇”，除了象这样表现被压抑“女性”的内心世界的主题以外，诗人们还以 “弃妇”和“出妇”为主题进行了咏叹。除曹丕以外，《寡妇赋》的作者和曹植也有着密切的关系。曹植是创造了新“文学”价值的曹操对确立期的建安诗坛寄予厚望的继承者。曹植的代表作有《七哀》《杂诗》《美女篇》《种葛篇》《精微篇》《出妇赋》《洛神赋》《列女传颂》等等，他是一个尤其以“女性”为创作题材的作家。在 “文学”价值被宣扬的建安诗坛确立期，我想以亲曹植派《寡妇赋》为开端，对“女性”为主题的诗赋的会咏、创作的事实予以关注。

丁廙的妻子是一个无名妇女，因何能参与建安的文学活动呢？可见建安的诗人集团，在文学上冲破了旧习，创造出了新生命。正是这种被孕育出的比较自由的价值观和开放的文学空间，才是对女性参与诗坛活动提供了可能性是一个主要原因吧？